

## (2) 水田を活用した多様な園芸産地の育成

野菜は、タマネギ生産者を対象に安定した契約量が出荷できるタマネギ産地の育成を目指し、早期畝立てや春植えの展示ほの設置や研修会を開催して、作付面積の拡大や病害虫防除や雑草対策の指導を徹底しました。

また、地域の伝統野菜である「下田なす」の形質維持のための採種について、部会やJAに対して採種技術の習得支援を行いました。

果樹では、新たな品目（ぶどう、なし）の産地化を図るため、新規栽培者の確保と育成を進めました。早期成園化軽労技術の導入や技術研修会の開催、個別相談を実施することにより、令和元年度までにぶどうでは16戸（10,269㎡）、なしでは10戸（3,323㎡）が新たに栽培を開始されました。

また、産地の安定的な継続発展を目指して甲賀地域ぶどう研究会およびなし研究会に対して会の運営に対する支援や、安定販売のための青果市場関係者との協議を支援して令和2年度からの試験的な市場出荷に道筋を付けました。

花きでは、本県の花き推進品目である「加工用中輪ギク」の生産拡大に向け、新たに12月上旬出荷作型を導入しました。年末出荷作型では、高品質な中輪ギクを確保するために再電照（うらごけ防止）と矮化处理（花首徒長の抑制）の適期実施が必須であることから、重点的に技術支援を行いました。この結果、出荷された中輪ギクは市場で高く評価され、年2作体系（8月盆前出荷作型+12月上旬出荷作型）が確立できました。

## (3) 茶産地の再構築と需要に応じた茶づくり

実需者から要望の強い有機栽培茶については、土山地域では茶商業者（問屋）と生産者によるコンソーシアムが、信楽地域では茶業協会が主体となってSDGsと有機農業を考える研究会が組織されるなど、輸出や新たな販路の開拓に向けた取組が行われています。これら新たな取組に対して、問題となる害虫被害に対応するため有機JAS体系に基づく防除体系の導入や栽培農家の組織化に向け支援しました。

## 3 「魅力ある農業・農村創出に関する支援 ～地域づくり～」

### (1) 地域資源を活かした魅力ある農村の創出

6次産業化の事業計画の認定を受けた集落営農組織に対しそれぞれの課題に応じた支援活動を行いました。また、新規計画の実施については実状を聞き取り、課題に応じた専門家である6次産業化プランナーと連携して支援しました。

また、昨年度に地域診断を行った集落に対して、ふるさと支え合いプロジェクト等を活用し、話し合いでの合意内容の実現に向けた集落活性化の取組を支援しました。

### (2) 集落ぐるみによる野生獣被害の軽減

管内の獣害による農作物被害は、侵入防止柵の設置などの対策を実施してきた結果、被害面積は約24ha、被害額は約2,100万円（H30）とピーク時の2割以下に減少しています。より一層の被害防止を進めるため、獣害被害集落を対象に集落単位での被害防止計画の作成や人材育成を支援し、住民主体による獣害対策の取組に重点をおいた普及活動を行いました。

本年度は、被害集落リーダーを対象に、中型獣被害の防除対策、柵の保守管理に関する指導者研修会を2回開催しました。また、集落獣害環境点検を新たに2集落で実施するとともに、被害集落での地域別研修会を1回開催しました。

### (3) 農業排水対策に関する農業者等の取組への支援

農業排水対策は、農業者個々が止水の徹底等を図ることで、発生源を減らす必要があります。また、「世代をつなぐ農村まるごと保全向上対策」では、農業排水対策の取組が必須要件であり、集落一体で農業排水対策を促進する必要があります。

このため当課の情報紙による浅水代かきや止水等の啓発に加え、代かき・田植え時期に啓発パトロールとともに農業排水調査を延べ15日間実施しました。

## てん茶向き品種のてん茶加工割合拡大による売上げ改善

対象者 甲賀市土山町 農事組合法人 G

### 【普及活動のねらい】

近年、抹茶原料の「てん茶」の需要が拡大していることから、G においては平成 30 年に大型てん茶工場を整備しました。しかし、全国的に多く栽培されている品種「やぶきた」のてん茶は、供給量が多くなったため単価は安値傾向にあります。

一方土山地域では、荒茶の付加価値向上のため、早くからかぶせ茶に着目し、「やぶきた」を被覆に適した「さえみどり」「おくみどり」「おくゆたか」「つゆひかり」「さみどり」等の品種（以下「てん茶向き品種」という）に改植してきましたが、これらの品種はてん茶としても評価が高く、「やぶきた」より 1kg あたり 1,000 円以上高い単価で取引されています。

そこで、てん茶向き品種のてん茶加工割合を高めて、G の売上額を改善することを目的に、課題となるてん茶向き品種の生産安定と面積拡大を図るため、適期の被覆開始の徹底、長期被覆に伴う樹勢低下を回避できる施肥体系の検討、新たなてん茶向き品種の検討、やぶきた改植の推進等による面積拡大などを支援しました。



てん茶工場内部の様子

### 【普及活動の内容】

まず、適期に被覆を開始できているか判断するため、てん茶向き 5 品種の茶園から 1ヶ所ずつモニタリング茶園を設定し、生育経過を数値化できるよう支援しました。次に、施肥体系の検討では、3 社の肥料を使用した 3 パターンの展示ほを設け、生育状況を比較しました。面積拡大策では、5 品種以外に新たなてん茶向き品種がないか選定するとともに、「やぶきた」を計画的にてん茶向き品種に改植するなどの支援を実施しました。また、こうした支援を実施するとともに、次年度の一番茶の収量確保のため、適期の秋整枝実施や赤焼病の徹底防除等についても支援しました。



モニタリング調査の様子

### 【普及活動の成果】

生育経過を数値化することによって、被覆開始時期では 1 品種を除きおおむね適正とされる 1.5 葉期に実施できるようになりました。施肥体系では土壌分析結果や生育経過から、S 社の肥料を使った体系が有望でした。また、面積拡大策では、新たなてん茶向き品種として 2 品種が有望であることがわかり、「やぶきた」1ha を「さえみどり」に改植しました。最後に、次年度の一番茶収量確保に向け、適期の秋整枝と「おくゆたか」など赤焼病が問題となった茶園で適期防除が実施できました。

当課は、今後も円滑なてん茶向き品種の活用拡大に向けて支援していきます。